

プロレタリア文学と児童労働

——佐多稲子『キャラメル工場から』の描いたもの——

鳥木圭太

佐多稲子（窪川稲子）の処女作「キャラメル工場から」はプロレタリア芸術聯盟の機関誌『プロレタリア芸術』1928年2月号に掲載された。この作品は当初、作者の幼少期の労働体験をもとにしたエッセイとして「若草」というタイトルで発表される予定であったが、原稿を読んだ中野重治がタイトルを「キャラメル工場から」にして小説として発表することを強く勧めた¹⁾。

こうして誕生した「キャラメル工場から」は、資本機構の中に組み込まれた少女の集団労働の現場を描いた文学作品としては最も初期のものの一つである。

本発表では、ひとまず主人公ひろ子を、作者佐多自身の投影と考え、この作品に描かれた少女の労働を通して現在にも通じる貧困と格差の問題をどのように考えることができるのかを、改めて見直したい。

1. 都市へ流入する労働者

総務庁統計局「国勢調査」および推計人口²⁾によると、1913（大正2）年に約281万人であった東京市の人口は、5年後の1918（大正7）年には、約334万人へと急激に増加している。

こうした人口急増の背景には、度重なる大戦がもたらした好況と不況の交替、大正以降時代以降顕著になった大都市における資本の集中と工業化にともなう労働者の流入、都市化へと向かう日本近代社会の構造変化があった。都市人口の急増は、同時に都市における貧民の増加をもたらした。1915年に上京した佐多の一家も、そうした都市流入者の中の一家族であり、長崎三菱造船所の書記を辞めて上京した彼女の父親は、佐多が「結局、勤め人でしか一生を送れない人間」³⁾であったと評するように、東京での新しい暮らしに適応できず、自ら仕事を探すこともできなかった、いわば労働不適合者であった。「キャラメル工場から」においても、そうした父親の姿が描かれる。

上京後のひろ子の一家は病人をかゝえて寸詰まりにつまづいていった。父親はその間にビール會社の人夫になり、仕出し屋の雑役夫になつた。それらの仕事が手近にあつたから、それも肩が腫れ、足がむくみ、そして止めた。祖母の内職では仕ようがなくなつた。その時ひろ子は五年生だつた。

こうして、ひろ子は、一家の窮状を助けるべく、キャラメル工場へ女工として通うことになるのだが、この時佐多もひろ子も、同じく尋常小学校五年生、11才であった。

2. 堀越嘉太郎商店とホーカー液

そのキャラメル工場というのは、和泉橋にあって、その時分に化粧品ではかなり有名な「ホーカー液」という乳液があって、クラブ乳液はたいへん有名ですけど、その次に大きかった会社ですが、そこでキャラメルもつくっていたんです。ところが、それがもう電車賃にも足りないくらいしか働けなかったから、行ってもしょうがなかったわけです。

佐多稲子『年譜の行間』（中央公論社 1983年10月）

ホーカー液とは化粧品のブランド名で、販売していた堀越嘉太郎商店（以下、堀越）は、堀越二八堂として1909（明治42）年頃に創業した化粧品会社である。1911（明治44）年に東京小間物化粧品卸商同業組合に加入後、社名を堀越嘉太郎商店と改変し、あわせて商号に「ホーカー液本舗」と本舗名を冠するようになる。「キャラメル工場から」においても少女工たちが化粧水の空き瓶を洗淨する場面が描かれる。



■ホーカー液の小瓶
『読売新聞』朝刊
1914（大正3）年8月11日

いつもキャラメルの仕事かと絶えと化粧液の繰洗ひをさせられた。もと／＼その工場は化粧液が賣出品であつた

地下室の繰洗ひ場所が三和土になつてゐてじめ／＼と水つぽかつた。ふみ板の上では裸上の足が冷たかつた。上の窓口から鱸の音が聞こえた。

「まあ！まるで水よ。お湯ないの？」一人がやけに大聲を上げた。

（中略）

みんなは何かむしゃくしゃする気持ちを押さへて、その小さな罫を一つ／＼ゆすいで行つた。少し水の外に手を出してゐるとびり／＼痛んで見る／＼ヒマが切れた。すると彼女たちはあはて、その手を水の中へつゝこんだ。

黙りこくて罫を洗つてゐるゐるひろ子の鼻先からはなみづが落ちてきた。

堀越は新聞や雑誌を利用した広告戦略や懸賞や観劇・遊覧ツアーなどのキャンペーンを多用する販売戦略により業績を伸ばし、同時期のクラブ化粧品や御園化粧品にならぶ大手化粧品メーカーとなった。また、1913（大正2）年に販路を関西・四国・中国・九州に広げ、1914年春以降、東北・北海道及び樺太・台湾・朝鮮・満州・中華民国へと拡大していった。こうした売り上げ増大にともない、当初日本橋区馬喰町4丁目23番地にあった本工場に加え、1914（大正3）年に東京市神田区柳原河岸14、15番地」に分工場を設け、1915（大正4）年に分工場を本店とした⁴⁾。

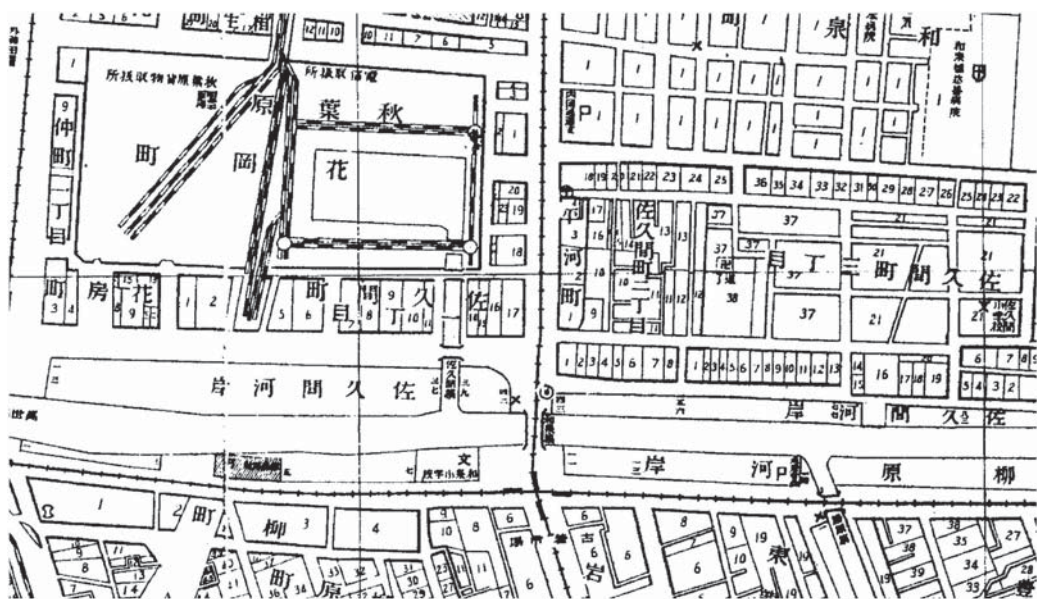
原田道寛偏『大正名家録』（二六社編纂局 1915（大正4）年8月25日）には、堀越嘉太郎について次のような記述がある。

堀越嘉太郎 日本橋区馬喰町四丁目二三番地

氏は埼玉縣児玉郡兒玉村大字關に生る 夙に郷費に學び兼ねて農事に従事す 然れども性甚だ農事を愛せず明治三十九年決然上京せしも偶々兵役に徴せられ入營の苦楚を嘗むるの止むなきに至る 四十二年出營と共に化粧用料の發明工夫に腐心す されど世間己に幾多類似品の流布せるあり徒に粗製品を出したりとて江湖識者の信を得るに至らず百方苦心の末會々舶來化粧料の優良なるものを得更に學者に諮り日新の科學を適用し改良したる上偏く化粧品店、理髮業、髮結職に請ふて實地使用せしめ結果何れも良好無比の評を得しかば意を決して發賣す 固より徒手空拳資金豊富なるに非ず富人家族の後援あるに非らず汎く廣告術を應用して大聲世に訴ることを得ず 而も品質の佳良と實効の顯著なるとは使用者の吹聴と相待つて蹶然化粧界を席卷し恰も洪水の汎濫して停止する所を知らざるが如く 起業未だ數年を出でずして店頭常に市を爲し發賣月高百三四十萬個を數ふるに至り斯界のレーコードを破るにいたれり 今や本店の増築と共に別に分工場を向柳原に設け多數の女工孜孜として製造に日も亦足らずと云ふ ホーカー香油亦氏の製に係り共に世に流布す（後略）

（スペース及び傍線は引用者）

この頃の堀越の所在は「神田區和泉橋際」となっており、神田川に掛かる和泉橋から下手に向かつて右側にあった。この柳原河岸にあった堀越本店こそが、佐多の通っていた「キャラメル工場」であり、そこでは各種化粧品のほかに、嗜好品「ホーカースキート」が製造されていた。



■大正8-10年神田和泉橋周辺地図

（「番地界入東京全図」『五千分の一江戸-東京市街地図集成』柏書房1990年6月 所収）

3. ホーカースキート

堀越嘉太郎商店が販売していた、唯一の食品が「ホーカースキート」である。これは大正4年9月から発売された箱入りの菓子で、値段は小7銭、大14銭（『読売新聞』朝刊1915年12月7日）であった。広告には、「本品は時代の要求に應じ、製菓部専任技師の嚴重なる監督の下に精製發賣せる滋養菓にして麦の主成分に新發見の滋養原料數種を加味しあれば品質優良にして味わひ宜しきは勿論滋養分豊富なること實にキャラメル以上なり、煙草代用として常に本品を用ゆる時は咽喉を整へ胃腸の調和を好くし心氣爽快に元氣忽ち快復するに至る、故に本品は事務家、運動家、讀書家、旅行家などに好く、劇場、宴會、遠足などの場合に宜し」（『読売新聞』同前）とあり、子供だけでなく、大人も対象とした嗜好品であった。麦と白砂糖から作った白飴を主成分とし、鶏卵、牛乳、バターに、朝鮮人参を配合したチューイングキャンデーであった。



■ホーカースキート広告『読売新聞』1917（大正6）年8月24日

1915（大正4）年に森永が自社製のミルクキャラメルを東京大正博覧会に出品して好評を得、また画期的な個別の紙サック包装を考案し、売り上げを飛躍的に伸ばしていた。キャラメルといえは森永の代名詞であり⁵⁾、朝鮮人参を配合してキャラメル以上の風味と効能を謳ったホーカースキートは森永ミルクキャラメルの対抗商品として売り出された。

森永の成功は、当然ほかの製菓業者を刺戟し、その時期に各種のキャラメルが売り出されるようになった。東京銀座三河屋のライトチョコレートキャラメル（『読売新聞』大正四年六月七日）、同じくフルーツキャラメル、東京渋谷ラクトー株式会社の乳酸菌を使用したラクトーキャラメル（『読売新聞』大正六年七月二十六日ほか）、日本製菓所のチャップリンキャラメル（『北海タイムス』大正七年九月二十日）などがそのおもなものである。雨後の筈のように輩出した群小キャラメルのなかには、森永のデザインをそっくりまねた類似品もあった。これらのキャラメルが、すべて、粗悪品ではなく、むしろ、森永のキャラメルより風味佳良のものもあったのだが、森永にしてみれば、偽物は偽物である。この対策に苦心した⁶⁾。

ホーカースキートも、森永のキャラメルと同じく一粒ずつ紙によって包装され、そうした小さな商品を扱う細かい手作業には、女性、それも手の小さな少女が適任とされた。

4. 機械化された身体

こうした労働現場の様子は、「キャラメル工場から」においては次のように描写される。

廿人ばかりの娘達が、二列にならんだ
臺に向かひ合せに立ち、白い上着を着、
うつむきになつて指先を一心に動かしながら
おしやべりをしてゐた。みんな仕事の調子をとるために、からだを機械的に劇しく揺すつてゐた。

ひろ子はしよぼ／＼^{ママ}眼の娘と女工頭の妹の三人で、新しい年少者だけが一組になつて一臺持つてゐた。三人はみんなから離れて室の片隅で、手元がまだ定まらないらしい調子で小さな紙切にキャラメルをのせてゐた。



■森永芝田町工場（東京第一工場）のキャラメル包装室内の盛況（『森永一〇〇年史——はばたくエンゼル，一世紀——』森永製菓株式会社 2000年8月15日）

ここで描かれるのは「仕事の調子をとるために、からだを機械的に劇しく揺す」る少女達の姿であり、それはすなわち、機械化された身体をもつ少女である。そうした労働によって疎外される少女達の姿は、例えば「ひろ子の隣にゐる娘はトラホームでいつもかなしさうに目がしよぼ／＼^{ママ}してゐた。身體に小さく萎びてゐた。」「白い上衣をきて、まくり上げた裸の脳を前だれの下に突くつこんでちゝかんで歩く彼女たちの姿は、何處か不具者のやうに見えた。」「彼女達は今までの日給額に追ひすがるために車を廻すコマ鼠のやうにもがいた。」というように描写される。

少女たちは、ノルマの達成、就労時間中における身体の拘束、ひろ子の場合にはこれらに加え、通勤（時間と距離）という要素によって疎外されていく。いいかえれば、少女等の労働はすべて数字によって置き換えられていくのだ。

こうした少女たちの労働も森永が1918年にアメリカからキャラメルの自動包装機を導入して以降、実物の機械に取って代わられることになる。「キャラメル工場から」は機械工業へと転換する過渡期の工場労働の様子を描き出すのだ⁷⁾。

さらに労働現場には、生産性を高めるために競争原理が導入される。

その間に事務員は一方の壁の所で、一枚を女工頭にもたせて置いて背のびをしなごうそれを貼りつけた。前日の成績表だつた。優等者三人と劣等者三人の名が毎日貼り出されるのだつた。

「やつぱりそうね」

「お梅ちゃんにはかなひつこない！」

「しつかりやらなきや駄目だぞ」

事務員がからかふやうにや／＼^{ママ}薄笑つた。ひろ子は誰かゝ読み上げる自分の名をきゝ

ながら顔を上げなかつた。勝氣らしい島田の女工頭が妹に、無愛想に「あんたもしつかりしなきや駄目よ」。と言つてゐるのが聞えた。

ひろ子は學校のことを思ひ出してゐた。學校でも彼女はいつも貼り出された。だが學校では劣等者は別に貼り出されなかつた。

ひろ子はどうかして早く仕事が上手になりたかつた。他の娘達五罐こしらへるうちにひろ子は二つ半しか出来なかつた。いつもよりも出来たと思ふ日でも最後の時間になるとやつぱり二つ半だつた。ひろ子はあせつた。どうかして劣等者の名前からだけでもぬけたかつた。

みんなは盛んに仕事をつづけた。それは競走^{マツ}だつた。彼女達はその成績表貼り出しを目あてにその小さなからだを根限り痛めつけた。



■運動会のキャラメル包装競争・目黒大日本ビール庭園（1915年4月）『森永五十五年史』森永製菓株式会社 1954年12月20日

実際は11才であるが、13才と偽って働いているひろ子は、当然ほかの女工たちよりも幼く、彼女らに比べて上手くキャラメルを包むことができない。尋常小学校に通っていたときにはいつも優等で貼り出されていたひろ子は、何とかして劣等者のグループから抜け出したいとキャラメル包みに精を出す。ここで注目すべきなのは、学校における競争原理を身体化したひろ子が他者との優劣によってでしか自己確認を果たせないという点である。ひろ子の願いは学校に行きたいということ

とであったが、しかし、その学校もまた、競争原理に支配される身体訓練の場であった。

1925（大正14）年7月8日、社会局第二部長・文部省普通学務局長連盟による「少年職業二関スル依命通牒」が發布され、学校と連携した児童の学卒時職業誘導が児童保護の観点からなされている⁸⁾が、そうした法制の成立を待つまでもなく、すでに学校は労働の場に児童労働を供給する身体訓練の場であった。

5. 商品として売られる身体

堀越は1915（大正4）年11月30日付の『東京朝日新聞』朝刊に女工募集広告を出している。この募集は一日限りで、掲載された新聞も限られていたことから、おそらく少人数の臨時募集であったと推測される。作中、ひろ子の父親は新聞の広告を見て娘をキャラメル工場に働きに出すことを思いつくのであるが、実際に佐多が働いていた時期（1915年12月頃）から逆算して、おそらく佐多の父親が見ていた広告もこの日付の募集広告であったことが伺える。

■堀越嘉太郎商店女工募集
広告（『東京朝日新聞』朝刊
1915（大正4）年11月30日）

あくる日ひろ子はその工場の事務室に、事務員と父親との交渉の間ぼつんとうり出されてゐた。

「十三、あ、さうですか」、事務員は名前や何かを書きとつた。

「まだほんとの子供でいろ／＼御面倒ですが」。

「はあいや、これでこゝの規則はこれになつてゐますが」。

事務員は父親の個人的になりさうな話を遠慮なく撥きながら話を進めた。

「キャラメル工場から」の描写では、話はひろ子の頭を飛び越えて、父親と事務員の間で交わされる。文字通り、ひろ子は「商品」として工場に売り飛ばされる。

ひろ子が商品としての自己を強く意識するのは、工場主の「奥さん」が自分を見る視線からである。

ひろ子はよその奥さんといふものは、小さな娘たちに對しては笑顔位見せるものだと思つてゐた。

女工たちが「相変わらず柔順に働いてゐた」ことを確認して「満足げに北叟笑」む工場主の「奥さん」は、彼女らを子供としてはみなしていない。彼女が投げかける視線は、ひろ子にとって電車の中で席を譲ってくれた「小父さん」から投げかけられる視線と対照的である。

席をあけてくれた小父さんが言葉をかけた、「お父ちゃんはどうしてんだい」。

「仕事がないの」。

ひろ子はそれを言ふのが恥づかしかつた。

「おやあそんでるのかい。そいつあたまらないな」。

さう言つて彼は親しげな顔付きをした。その車内では周囲の痛ましげな眼が一齊に彼女の姿にそゝがれはしなかつた。彼等にとってはそれが自分達自身のことであり、彼女の姿は彼等の子供達のすがたであつたから。

ひろ子は常に、大人から見られる自分自身の姿を意識することで、自身を社会の中に定位しようと試みるのだ。しかし、そこに見出されるのは、労働者であると同時に商品として生産諸関係の中に組み込まれた自身の姿である。

キャラメル工場で一月ほど働いた後、ひろ子はまたもや父親の思いつきによって、工場を辞めることとなる。もともと電車代をひけばいくらも残らなかった賃金が、日当性から出来高制に代わり、さらに減らされてしまったことが原因であつた。

工場ではこの間から日給制が止められて、一罐の賃金を數へるようになった。一罐七錢だつた。仕事に慣れた娘たちにとっては収入が多くなつた。しかし大方の娘たちは、今までの日給と同じ賃金を取る為にはもつと／＼その身體を痛めつけねばならなかつた。彼女達は今までにもう精一つばいの働きをしてゐた。日給が罐の計算になつたからと言つてす

ぐにそれだけ多く働かだすことはとても不可能だつた。いつせいに収入が減つたひろ子などは三分の一値下げされた。そして毎日成績表が貼り出された。晝飯後も女工頭が「さあ初めるのよ」と言ふ必要がなくなつた。彼女達は今までの日給額に追ひすがらるために車を廻すコマ鼠のやうにもがいた。

それまで工場側は、少女たちの競走意欲により自主的に労働へと駆り立てていたが、ここでさらに追い打ちをかけるように出来高制を導入することで、優秀な女工には給金アップを餌にさらなる生産増加をはかり、成績の悪い女工には人件費を削減し、さらに危機感をあおることにより一層の努力を強いる。いわば雇用側にとって一石三鳥の方策であり、一部の有能な者には増収となるために、批判も働き手の責任に還元してかわすことはたやすい。キャラメル一缶7銭という賃金設定は、この利益を上げる絶妙の値段設定である。それは奇しくも、実際のホーカースイート小一箱分の値段であった。

「いつそもうどうかね。止めにしたら」。父親は又何でもないやうに言ひ出した。ひろ子はハツとして顔を上げた。

「そしてどうするの」。

「しようがない。後はまたどうにかなるさ」。

「少し無理だな今の所は、遠くて」。

病人が繪具の筆を置いて寝返りながら言つた。父親はその言葉に力を得て今度ははつきり切り出した。

「止せ、せうがないよ。——毎日電車賃を引けや残りやしをいぢやないか」。ひろ子はそれが自分の力の足りないせいのやうに思はれた。その夜ひろ子は幾日ぶりかで、やつと放たれたやうな気持ちで床についた。

ひろ子はほっとした気持ちで床につくが、それは彼女の労働の終わりを意味するものではなかつた。

まもなくひろ子は、中華料理屋の女中になるために、目見得（見習い）として住み込みで働くことになる。そこで、長崎時代の小学校の教諭から一通の手紙を受け取る。

誰か、ら何とか學費を出して貰ふやうに工面して——大したことでもないのだから——小学校がけは卒業する方がよからう——とそんなことが書いてあつた。

この手紙を仕事中唯一自由になれるであろう中華料理屋の便所の中に隠れて読んだひろ子は、一人で涙を流す。この時ひろ子はすでに住み込みになっていて、学校に戻るといふ道はさらに遠のいている。「大したことでもない」といふ教師の言葉は、一見ひろ子に同情を寄せている素振りを見せつつも、ひろ子の実情に即したものではなく、その内実はひろ子を冷たく突き放すものでしかなかつたのだ。

6. 「キャラメル工場から」の描いたもの

「キャラメル工場から」については、その描写について二通りの視点が指摘されている。

たとえば、石川巧は「語り手はそんな主人公に対して二通りの呼び方を厳密に使い分ける。主人公を外側から俯瞰し、突き放すようにして客観的事実だけ描写しようとするときには「彼女」という第三人称で呼び、内面に踏み込んで、その心境や感覚を伝えようとするときには「ひろ子」という固有名詞を使うのである（もちろん、同一文章の中で反復されるときは、「ひろ子」と書く場面でも「彼女」と記されたりする）。⁹⁾と述べ、同様に小林裕子も「階級的抑圧（a）と家父長制による抑圧（b）という二重の権力の下であえぐ娘の苦しみを、語り手は二つの視点によって書き分けている。一つは女工たち（しばしば「彼女達」と呼ばれる）の中にひろ子をも含めて眺め、階級的対立を告発する神のような視点A、もう一つはひろ子の感情や感覚に寄り添いつつ、ひろ子と女工たちとの相違点にきめこまかに注目する視点Bである。」¹⁰⁾と述べて、こうした二つの視点が「ひろ子をより立体的に分析的に造型し」ていると分析する。

こうしたこの時期の佐多の小説の描写について、同時代においては梶井基次郎の興味深い指摘がある。梶井は佐多の小説「彼女等の會話」（『戦旗』1928年7月）について、作中に「生きた生活」が描かれることによって、そこから登場人物たちの「感情のみな動いてゐる描寫」がなされている点を評価するが、同時にこの作品が作者の主観を排除して書かれた結果、「現實を剔抉すること」に失敗している点を指摘する。

一言にして云へば、一つの「世態」。——これは「世態人情」の世態であるが、作者の階級的な立場にも拘はらず、私にはその感じが非常に強かつた。これには「旦那さま」が「彼」になつたので驚いてるといふやうな經濟闘争の最初のショックにあふ少女を作者が捕へて來たことに、既に題材的な制限があるのであるが、それにしてもなほ、現實を剔抉することの不足、主観を書き込むことの不足が、この作品にそのやうな印象を與へるやうになつたことは争へないのである。作者はこれが一つの世態の描寫、新しい「浮世繪」として見られることには、必ずや大きい不満があるだらう。

しかし、ともあれ、ここには生きた生活が——書かれてある感情のみな動いてゐるがある。定跡にあてはめて書き下ろされた爭議臺本ではない。これは推稱さるべきものである¹¹⁾

「彼女等の會話」は当時頻發した書店争議を題材に扱った小説であり、主人公の視点に寄り添った情景描写という点では、前作「キャラメル工場から」と同じ描写手法が用いられているが、そこで描かれるのは労働の現場ではなく書店争議の様子である。集会の中で店員達が自分たちの待遇に関する不平演説を行う場面があるが、それは作者の視点を通して描かれた労働の実際ではない。したがって梶井が指摘するように、そこに作者の主観を通すことで生まれる読者に迫るリアリティはない。

みち代は組合の人が店主のことを言う時の言葉の、乱暴なのにおどろいた。利どんたちもおなじようになって、今まで旦那様と呼んでいた店主のことを「彼は……」と言った。さっ

きまで、どうなることかとしよげていた小売員たちもすっかり元気になって、みんな立ってそれぞれ不平演説をやった。学校へ行かれぬこと、殴られること、休みの少ないことなどが多かった。みち代は聞いていて本当だと思った。今まで気づくともなく過ごしていた自分たちの毎日が、どんなにひどいものだったかということが判然と解ってくるのだった。¹²⁾

これに対し「キャラメル工場から」では、同じ描写手法を用いながらも、少女達の身体を抑圧していく機構を、読者に彼女らの日常を追体験させる事で一つ一つ明らかにしていく。「キャラメル工場から」には「階級意識」に目覚めた労働者も、彼らを指導する前衛も、組織も出てこない。つまりこの作品はナップのリアリズム理論＝組織論にもとづかない作品なのであるが、そこで別扱される労働の現実「彼女等の會話」の比ではない。

マルクスは「物象化」について「労働者が生産手段を使うのではなく、生産手段が労働者を使う。そしてそのことによって、生産手段は資本なのである。資本が労働を使うのである。(中略)すでにその簡単な形において、この関係は、一つの転倒、すなわち物の人格化および人間の物化である。」(『マルクス・エンゲルス全集』26巻第I分冊、大月書店1969年6月25日 496頁傍点原文)と述べ、「物象化」が商品、貨幣、資本それぞれの次元において生じ、本来実践的で自由なものであるべき〈人格〉が、自らの作り出した〈物〉によって逆に支配されるという現実の転倒を意味しているとした。

「キャラメル工場から」が小説として優れているのは、商品として社会的生産諸関係のなかに位置づけられた自己の身体への認識を通して、自己の主体とそれを「商品」たらしめている社会構造に到達できるということにある。そしてその自己の身体の外、物象化の認識への到達を可能とするものこそ、少女の日常性にもとづくリアリティーであり、それを通して描かれた感情とその生起のメカニズムなのである。「キャラメル工場から」から「彼女等の會話」へといたる中で、佐多自身がナップの創作理論を体得し、そのイデオロギー性を作品の中に導入していくことで、作品のもつ「現実を別扱する」力は失われていった。梶井の批判点はそこにある。「キャラメル工場から」で延々と続く労働現場の描写は、中野重治の言葉でいえばひろ子の「感情が組織化」されていく過程であり、その表れが最後の場面でひろ子が流す涙なのであり、それこそが物象化にあらがう力となるのである。

7. グローバリゼーションと児童労働

前平泰志は、児童労働をめぐる言説の分析を通して、グローバリゼーションという現象が「子ども」という社会的に構築された概念をもグローバル化し、社会教育・生涯学習という概念もまたグローバルに認知されナショナルな教育制度に組み込まれていく中で、国家間における労働形態の差異を隠蔽し均質化をはかり、ひいてはそれが〈子ども〉という新たな制度の形成へとつながるといふ。

国連や世界銀行の提唱する「貧困」という概念が成立するのは、貨幣経済が浸透している社会においてであり、市場経済が支配していない社会においては、「貧困」を数値化するこ

とは意味のない〈文字通り、ナンセンスな〉作業である。市場経済がグローバル化されるようになると、かつては互酬や再分配を通じて人々の生活が維持されてきた世界のどのような共同体においても、貨幣を媒介にして経済生活を営まざるを得なくなる。生存に必要な物質を得るためには、貨幣が必要になってくる。そして、貨幣を得るためには、換金できる商品作物を作らねばならないモノカルチャーがこのようにして発生する。「貧困」はこの過程から発生するのであり、この過程以外ではない。グローバリゼーションの進行は、かつて「貧困」などと無縁だった人たちが、〈貧困〉の烙印を押され、そして単に烙印を押されるだけでなく、文字通り生存に必要なラインを下回る貧困者として登場することを余儀なくされる¹³⁾。

グローバリゼーションが個々の貧困を均質化し隠蔽するという前平の論をひとまずは了承するとしても、しかし問題は、現実の問題として「弱者」としての子供が、弱者故に安価な労働力として売買され、すさまじいまでの貧困の中にいること、そしてそのこととわれわれがどのように相関しているかを考え、どう向き合うのかということである。そのためには、隠蔽された個々の貧困をどのように知覚するかということが考えられねばならない。

前平は「文化的、社会的、経済的に構築されたさまざまな子ども時代のモデルがありうることを認めることは普遍的な教育を達成することに向かう努力を賤しめるものではない。重要なことは、ローカルな構築が「理念的な」子ども時代のグローバルな構築物とどのように相互作用するのかについてのニュアンスを理解することである。」と結論づけるが、はたしてそのことによって上記の問題は解決され得るだろうか。

「キャラメル工場から」では、すでにこの学校という教育現場と労働現場との共犯関係が浮き彫りにされてしまっている。そこで描かれたのは、社会の底辺にある貧困層の労働者の、さらに底辺にある女性・子供という二重に階層化された労働の形態であり、労働力として資本機構の中に組み込まれた少女の声なき声、子供故に言語化されえない感情である。それゆえにこれは、前平が言うような統計などによっては数値化されない貧困・搾取の実態なのである。

付記

「キャラメル工場」からの引用に際しては、初出（『プロレタリア芸術』1928年2月）によった。

注

- 1) 佐多稲子「時と人と私のこと（1）——出立の事情とその頃」（『佐多稲子全集 第一巻』講談社 1977年11月18日）、中野重治「くれなゐの作者にことよせて」（『都新聞』1938年12月22日）など
- 2) 『日本長期統計総覧 第1巻』日本統計協会 1987年10月1日
- 3) 『年譜の行間』中央公論社 1983年10月
- 4) 堀越嘉太郎商店の動向については、及川益夫『大正のカルチャービジネス 絵画通信教育と広告イラスト』（皓星社 2008年5月1日）に詳しい。
- 5) 『森永一〇〇年史——はばたくエンゼル、一世紀——』（森永製菓株式会社 2000年8月15日）によると、森永は同年（1915年）12月14日、「森永ミルクキャラメル」「森永キャラメル」を商標登録している。森永キャラメルの値段は10粒入り5銭であった。ちなみに、1919（大正8）年当時、森永の製

造工場で働く女子工員の給料は1日20銭程度であった。

- 6) 東京百年史編集委員会編『東京百年史 第四巻』(東京都発行 1972年3月31日)
- 7) 森田克徳『争覇の経営戦略 製菓産業史』(慶應義塾津田大学出版会2000年11月8日)は、森永の成功の要因の一つとして「海外の先進的かつ優秀な各種製品製造機械や付属設備を導入し、技術者を招聘のうえ、従業員の技術指導・教育にあたらせたが、最終的には、紙サック入り「ミルクキャラメル」の製造機械や自動包装機にみられたように、長期継続的に改良・改善をつうじて、各種の機械を創製していった。これは保守を含め新製品の開発等飛躍的な技術力および生産性の向上をもたらすこととなったのであった。」と指摘している。なお、森永は当時、最新鋭の機器とともに、社員や工員の賃金や社会保障制度についても欧米式の制度を取り入れており、より近代的な設備や環境が整えられていた。したがって、単純に堀越の場合と同一視することはできないが、本論においては、森永が近代日本における製菓産業の典型となったことをふまえて、あえて取り上げることにした。
- 8) 高瀬雅弘「戦前期少年労働をめぐる制度とまなざし 「児童労働問題」から「少年労働問題」へ」(『社会学年誌 41』早稲田大学社会学会 2000年3月25日)によれば、1911年の工場法成立から職業紹介所が国営化される1938年までの時期における青少年労働者の保護について、工場法の適用から外れてしまう児童労働者の包括的な保護を期して少年職業紹介というシステムが制定されたという。これは学校に通わず、定職に就かずという、未就学・未就業の期間——空白期の追放を大きな目的としており、それにともない、〈保護〉という観点から、教育上の要請から労働力の確保の要請へと移行したこと、それが上級学校への進学を一部の者に限定するという機能を持っていたことを指摘している。
- 9) 「彼女の朝から別の朝へ——佐多稲子「キャラメル工場から」論——」(『国語と国文学』1996年10月1日)
- 10) 「マントという記号——「キャラメル工場から」」(『佐多稲子——体験と時間』翰林書房1997年5月20日)
- 11) 梶井基次郎「『戦旗』『文藝戦線』七月號創作評」(『文藝都市』1928年8月1日)
- 12) 「彼女等の會話」(『戦旗』1928年7月 引用は『佐多稲子全集第一巻』講談社 1977年11月18日)
- 13) 前平泰志「グローバリゼーションと〈子ども〉の再制度化—児童労働をめぐる論争を中心に—」(日本社会教育学会年報編集委員会編『グローバリゼーションと社会教育・生涯教育』東洋館出版 2005年9月15日)